

## 琵琶湖の乙女ヶ池内湖にボタンウキクサ

藤井 伸二

Shinji Fujii: A record of *Pistia stratiotes* L. growing in a pond adjacent to Lake Biwa.

1998年11月9日に琵琶湖で調査を行った際、本種の群落を確認した。ボタンウキクサの琵琶湖北湖における過去の記録は、1994年の近江高島町菰の浜で視認された漂着個体である(藤井, 1995a, 1995b)。しかし、これは数日間の雨で琵琶湖の水位が30cmも上昇した直後の記録のため(藤井, 1995a)、琵琶湖で生育していたものかあるいは流入河川から流れてきたものかの判断ができなかった。また、私が1994年から行っている琵琶湖北湖(とくに湖西地方)の継続調査では、上述の記録以降はボタンウキクサの生育を確認できなかった。今回の群落の発見は琵琶湖北湖での確実な自生状態の記録と思われるので、ここに報告する。

生育場所は琵琶湖北湖に隣接する乙女ヶ池内湖(近江高島町)の西端部分で、マコモ帯周辺の水のよどんだ場所であった。個体群規模は数十平方メートルと小さなものであるが、1995年~1997年の調査では同所での生育をみていないことから、1998年になってはじめて侵入したと考えられる。乙女ヶ池の個体群は旺盛な生育状況を示し、直径20cm以上のロゼットには多数のラメット形成と開花がみられた。野外条件においては冬季の低温によって枯死するものと考えられるが、種子越冬の可能性も指摘されており(山本・藤井, 1996)、今後の琵琶湖での

動向に注意を払う必要があるだろう。

なお、乙女ヶ池は琵琶湖北湖ではおそらく唯一のサンショウモ自生地であり、他にオオアカウキクサ、ドクゼリ、トチカガミ、オオマルバノホロシなどが豊富に見られる。一方、ミクリは1995~96年に大きな群落を形成したが、現在は消滅しつつある。また、乙女ヶ池の西岸部は1994年に親水公園として整備されたために、近年はバス・フィッシング者が多く訪れるようになり、人為的影響が急速に高まっている。ボタンウキクサはおそらく人為的に持ち込まれたものと考えられる。

標本記録: 滋賀県高島郡高島町勝野乙女ヶ池, Nov. 9, 1998, S. Fujii 6395 OSA.

## 引用文献

- 藤井伸二, 1995a. 博物館の行事の記録「琵琶湖の水草」. Nature Study 41 (1): 7.  
 藤井伸二, 1995b. 1993・1994年に採集された琵琶湖産水草標本目録と分類・生態ノート. 自然史研究 2(11): 153-166.  
 山本博子・藤井伸二. 1996. ボタンウキクサの種子越冬と発芽の記録. 水草研究会会報 59: 17-18.

○太刀掛 優編『帰化植物便覧』(比婆科学教育振興会、1998年12月、306p、3300円+税)

次々と新しい外来植物が侵入する一方で、消えゆくものもあるために帰化植物の実態を把握することはむずかしい。それだけに今まで報告された帰化植物95科1323種が一覧できる本書は重宝である。種ごとに参考文献と一部の文献に関しては報告内容の抄録が付されている。

例えばボタンウキクサのところを見れば、今までに当会報に掲載された5編の報告が、内容の要約とともにリストアップされている。実にさまざまな文献から情報が拾ってあるので編者の努力を多とすべきである。新しい帰化植物に関する報告は、短い記事であったり、あまり

目に触れない雑誌に発表されているものが少なくないために、このような情報がまとめられたことはたいへんありがたい。

なお、どこまでを帰化植物に含めるかは難しい問題だが、本書では「史前帰化植物?」とされるもの(コナギ、イボクサ、ヒデリコなど)も多く含まれるために、総種数が膨らんだのであろう。なお、水草ではヒンジモが挙がっているが、これは帰化ではないだろう。

本書は一般書店では扱われないので、入手は比婆科学教育振興会(〒727-0013 広島県庄原市西本町1-7-7 中村慎吾 様方 TEL/FAX 08247-2-3234)に照会のこと。(角野 康郎)